

【20】 ” 台風騒動記”

これは映画の題名です。

1956 年（昭和 31 年）に公開された、山本隆夫監督、佐田啓二、野添ひとみ主演の、題名の通り、田舎町の台風による災害をテーマにした喜劇風の映画です。

1953 年（昭和 28 年）に岩波新書として出版された、杉浦明平の"台風 13 号始末記"が基になっています。この 1953 年 9 月に、近畿、中部を襲った台風 13 号は、とくに伊勢湾、三河湾に甚大な高潮災害をもたらしました。

この時、三河湾沿岸のとある町で、町長を含む町の有力者たちが、台風の災害に乗じて、被害の無い古い木造の校舎を台風で被災したことにして取り壊し、災害復旧費でコンクリート建に改築しようとした事が悲喜劇の始まりです。

映画では、町のバス停を降り立ったサラリーマン風の格好の良い青年（佐田啓二）が、国の災害査定官と間違えられ、わけもわからないままに料亭へ連れ込まれて、接待攻めに遭い、否応無しに騒動に巻き込まれていくというのがストーリーです。

後に建設省に入るなんて想像もしなかった高校生の私が、腹を抱えて大笑いした、可笑しいがまじめなテーマが込められている映画でした。

公共施設の災害復旧は、地方自治体が突然に予想もしなかった過大な支出を強いられるということで、戦前から国による手厚い補助制度がありました。

河川、道路などの公共事業費の乏しかった時代には、原形復旧（もとの形に戻す）という制限はありましたが、災害復旧費は国からもらえるセミ公共事業費として地方自治体から頼りにされていたのです。

そのため、ついつい勇み足で、老朽化した施設や壊れかかった施設を、災害復旧事業にしてもらおうという動きが頻発したのです。

”台風 13 号始末記”にも出てきますが、当時「天狗橋事件」というのがあって、壊れていない橋梁を災害で被災したことにしようと壊したところ、運悪く人を巻き添えにして死傷者を出したということがあったくらいです。

この映画の施設は学校の校舎で、役人の立場で云うと文部省所管になり、建設省（当時）とは流儀が異なるかも知れませんが、本質は同じです。

映画という大衆娯楽のテーマになったということ自体が、災害復旧をめぐる当時の社会状況をよく物語っていると思います。